

# 麻雀殺人事件

海野十三

青空文庫



それは、目下もっかうりだ売出しの青年探偵、帆村ほむらそうろく莊六にとつて、諦めあきらめようとしても、どうにも諦められない彼一生の大醜態だいしゅうたいだった。

帆村探偵ともあろうものが、ヒョイと立って手を伸ばせば届くような間まじ近かに、何時間も坐っていた殺人犯人をノメノメと逮捕そこなし損ったのだった。いや、それどころではない、帆村探偵は、直ぐ鼻の先で演じられていた殺人事件に、始めから終しまいまで一向気がつかなかったのだというのだから口惜くやしがるのも全く無理では

なかった。

「勝負ごとに凝るこるのは、これだから良くないて……」

彼はいまだにそれを繰返しては、チエツと舌を打っているところを見ると、余程よほど忘れられないものらしい。彼が殺人事件とは気づかず、ぼんやり眺めていたという其の場の次第は、およそ次のべるようなものだった。

\* \* \*

それは蒸し暑い真夏の夜のことだった。

大東京のホルモンを皆よせあつめて来たかのような精力エネルギー的な新開地しんかいち、わが新宿街しんじゅくがいは、さながら油鍋あぶらなべのなかで煮にられているような暑さだった。その暑さのなかを、新宿の向うに続

いたA町B町C町などの郊外住宅地に住んでいる若い人達が、押しあつたりぶつかり合つたりしながら、ペーブメントの上を歩いていた。郊外住宅も案外涼しくないものと見える。

帆村探偵は、ペーブメントの道を横に切れて、大きいビルディングとビルディングの間の狭い路を入ると、突当りに「麻マー雀ジャン」と書いた美しい電気看板のあがっている家の扉ドアを押して入った。

彼は暑さにもめげず大変いい機嫌だった。というのもその前夜で、永らくひつかかっていた某ぼうだいじけん大事件を片付けてしまったその肩の軽さと、久しぶりの非番を味あじわう喜びとで、子供のように、はしゃいでいた。三年こつち病やみつきの麻雀を、今夜は思う存分闘わしてみようと思った。

「あ、こりや大変だ」

と帆村は、麻雀倶楽部クラブの競技室のカーテンを開くと、同時に叫んだ。この暑いのに、文字通り立錐りっすいの余地のない満員だった。

「いらつしやいます。今日は土曜の晩なもので、こう混こんでんですよ、センセーツ」

麻雀ガールの豊とよちゃんちゃんが、鼻の頭に噴きだした玉のような汗を、クシヤクシヤになった手帛ハンカチで拭き拭き、そう云った。

「先生——は、よして貰もらいたいね、豊ちゃん。あの星尾信一郎ほしおしんいちろう氏は本当の先生なのに、あいつのことは、シンチャン、シンチャンってね……」

「いけないワ先生」と豊ちゃんは、真紅に耳みみたば朶たばを染めながらそ

れを抑えた。「いま星尾さん、いらしっているのよ。そんなこと聞えたら、あたし、困っちゃうワ」

「困るこたア無いじゃないか、豊っぺさん」と帆村はますます上機嫌に饒舌しゃべった。「こんなことは、聞えた方が目的は早く叶かなうよ。それとも僕、本当にシンチャンに言つてやろうか。豊ちゃんが実は昔風のなんとか煩わづらいをしています。先生の御意見はいかがでしょうツてね。だけど僕のことをセンセといいません。誓つてくれなきや、僕やつてやらんぜ」

「そんななんないわ」

「豊ちゃん、記録ーウ」と叫ぶものがある。

「ハーイ、唯ただいま今」とそれには答え、それから帆村の方に向き、

低い声で言った。

「あのシンチャンのお仲間、今日もお昼からきて特別室でやつてなさるのよ。帆村さんも、あっちへいらつしやらない」

特別室というのはホールの隣りにある長細い別室で、ここには割合にゆつくり麻雀卓テーブル子が四台並べてあり、椅子にしても牌こまにしてもかなり上等のものを選んであり、卓子テーブル布子クロスに、白絹しろぎぬをつかっているという贅ぜいたく沢たくさだった。帆村が入つてみると、どの台にも客がいた。一番窓際まどぎわの卓子テーブルに、豊ちゃんとよちゃんの云つた「例のお仲間」の四人が、一つの卓子テーブルを囲んで、競技に夢中になっていた。帆村は側かたわらの長椅子に身を凭もたせて、しばらく席が明くのを待っていないしなければならなかった。彼は見るともなしに、「例の

お仲間」の方に顔を向けていた。

「こんなに蒸し蒸しするのでも太陽の黒点こくてんのせいだよ」と一番、入口のカーテンに近いところに背を向けて腰を下ろしている理科大学の星尾助教授が言つて、麻雀の牌こまをガチャガチャと、かきまわした。

「太陽の黒点なんか蹴つとばせ、てえんだ。——やあ、いいものを引っぱつてきた」と機嫌のよいのは、仲間の一人で、星尾助教授の対門むかいにいる慶応ボーイで水泳選手をやっている松山虎夫だった。

「今日は、ちつともいいのが来ないわ」と松山の左手に坐つていた川丘みどりが、真紅に濡れているような唇をギユツと曲げて慨なげ



に入れて貰って競技を始めた。その席は、例のお仲間の卓子を正面に見るようなところだったので、彼は牌こまを握る合間合間に顔をあげて、星尾助教授の手の内を後からみたり、川丘みどりの真白な襟えりあし足あしのあたりを盗み視ぬすみして万まんざら更さらでない気持になっていた。

それから帆村は、だんだんと競技に引き入れられて行つたので、例のお仲間連中の行動を一から十まで観察するわけには行かなかつたが、あとから考えると、次に述べるようなことが、気にならなないこともなかつた。

第一は、麻雀ガールの豊ちゃんが入ってきて、星尾助教授の背うしろ後しろによりかかり、永い間積極的な態度をとっていたこと、それに対して星尾は、すこし迷惑らしい態度をしているのを知っておか

しかった。

第二は、松山がスポーツ好<sup>ご</sup>みで、

「ええいッ」

と大声をあげて場に積んである麻雀牌<sup>こま</sup>をひっばつてくることだ。気を付けていると、その度に、彼は麻雀牌の面<sup>めん</sup>に刻<sup>き</sup>みつけてあるしるしをギユツと強く撫でまわした。それがために、拇<sup>おや</sup>指<sup>ゆび</sup>の腹が痛くなりはしないかと思われた。これは彼の悪い癖<sup>くせ</sup>である。

第三は、星尾助教教授が、大きい和<sup>あ</sup>がり<sup>り</sup>に躍<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>つて喜んだ拍子<sup>し</sup>に、隣りの園部の湯呑茶碗<sup>ゆのみぢやわん</sup>をひっくりかえしてしまったことだ。大騒ぎになつて牌<sup>こま</sup>をどかせるやら、濡れたところを拭<sup>ふ</sup>くやら、新しい卓<sup>テーブル</sup>子<sup>ブル</sup>布<sup>クロス</sup>を持ってこさせて、四人が四隅<sup>よすみ</sup>をひっばつて、

びよう  
 鋏で卓子へとめるやら、うるさいことであつた。一度は、

「吁あツ、痛ツ！」

と松山が大声で叫んだので、みると、指の尖端とっさきを口の中に入れて舐なめていた。なにか乱暴なことをやったものらしい。それを誰かが野次やじつたものらしくドツと笑声がわきあがつたが、どうしたものか、其後そのご一座は、たいへん静かであつた。

「どうかしたの、みどりさん。どんな氣持なんですか、ええ？」

園部が、その対門むかいにいるみどりを頓とんきよう 狂きやうな声で呼ぶのをきいて、帆村は何とは知らずハツとした。顔をあげてみると、どうしたというのだろう、川丘みどりの顔色が真ま蒼さおだつた。常から透すきとおるように白かつた皮膚から、血の氣けがすっかり引いてしま

つて、まるで板硝子ガラスを重ねておいて、それを覗きこんだような感じがした。園部は、これも青くないとは云えない顔色に、憂うるわしげに眉まゆをひそめて、みどりの顔色をのぞきこんでいる。

「早く医者にみて貰いなさい、僕、すぐ呼んできたげるから……」と園部は、心配で心配でいても立っても居られないという様子だった。

「みどりさん、気分でも悪いのかい」

星尾助教授も競技の手を休めて言った。

「いいのよウ、直すぐなおるわよ」

「だけど、……そりや診みて貰った方がいいですよ、ね、ね」と園部は今にも馳け出しそうな姿勢をするのであった。帆村は思いあ

たるところがあつた。例の仲間のうちで、川丘みどりをスポーツ・マンの松山虎夫と、星尾助教授とで張り合つていているという世間せけん公知こうちのかたわら、園部も実はみどりを恋しているのだという噂はチラリと聞きこんだことがあつたが、それはどうやら本当らしい。「お、お、おれは」と其の時まで独り黙つていた松山が苦しそうに呻うめいた。「おれは頭が痛い。眩暈めまいがする。少し休みたい、ウウ」そう云うと、彼は立ちあがり、フラフラと室へやを出ていった。「いやに病人ばやりだな」と星尾が眩つぶやいて、意味なく笑つた。一本歯の抜けたような松山の空くう席せきが、帆村の眼に或る厭いやな氣持をよびおこさしめた。それは不吉ふきつな風景である。折角せつかくこうして探偵たる氣持をわすれて麻雀を打ち、のうのうとした氣分にな

っている筈の彼の心は、いつの間にか掻き乱かみだされているのを感じずには居られなかつた。四人の面子メンツが坐っている筈はずの麻雀マジャンテー卓ブルから、一人が立つて便所に行つたりすることは、よくあることではないか。それに自分は何故、こんなことを気にしているのだらう。だが、ふりかえつて此この倶楽部にきたときからのちのことを考えてみるのに、自分は競技に夢中になりたいと思つていながら、実際は隣の卓子の様子ばかりを気にしていたではないか。彼は、この室に入つて来た最初に、川丘みどりが、便所に立つたらしく一度席をあげたのを思い出した。しかしそのときは別になんとも怪あやしむ気にはならなかつたのであつた。それに今はどうして、気になるのであろうか。空席は同じ一つだが、今の場合は、

みどりが気分のわるい様子で、ふさいでいるのが気になるのではあるまいか。若しそうだとすると、或いは自分も、本気でみどりを恋してるのかしら——園部や、星尾や、松山などと同じように。松山といえ、どうして彼は帰ってこないのでしょうか。なぜに川丘みどりが真まつさお蒼さおになってから、急に松山も頭が痛むなどと病気になったのであろうか。果して松山は病気なのかしら。帆村の脳髓のうちには、何時いつの間まにやら、さまざまの疑問が湧いているのに気がついた。いや、これは浅間あさましい探偵という職業意識である。今夜は仕事を忘れて、ただ麻雀を打っているのではないか。つまりんことは考えまい。——

そのうちに、取りのこされていた星尾と園部とみどりの三人は、

もう勝負を争うことをあきらめたものか、卓子を離れて、この室を出て行つた。帆村探偵は、ようやく安易あんいな気持になつて、競技に夢中になることができたのであつた。

## 2

帆村探偵の卓子も、それから三十分ほどして、勝負が終つた。

最後の風に、莫迦あたりを取つた彼は、二回戦で合計三千点ばかりを稼ちよつとぎ、鳥渡ちよつといい気持になつた。卓子を離れるときに、あた

りを見廻すと、どの卓子もすでに客は帰ったあとで、白い真四角クローズいろどりの布の上に彩さまぎまの牌パイが、いぎたなく散らばっていた。時計を出してみると、もう十一時をすこし廻っていた。

隣りの広間ホールにも客はもう疎まぼらだった。豊ちゃんが、睡そうな顔をして、近所の商店の番頭さんのお相手をしていた。

「豊ちゃん、さよなら」

「さよなら、センチ——じゃなかったホーさん」

「みんな、もう帰っちゃったかい」と、聞かでもよいことを帆村はつい訊きいてしまった。

「お嬢さんに、園部さんにシンチヤンは、今帰るからって帰ったばかりよ。松山さんだけ奥に寝ている筈よ」

「ナニ、松山さんは本当に病氣だったのか」

と帆村は、意外だという面持をした。

「あら、どうして？ 気分がとても悪いんですって。お医者を呼びましようかって、先刻さつききいたんだけど、いらないうって仰おっしゃ有ったのよ。シンチャン達、しばらく見ていなすったんですけれど、もう遅くなつたし、帰るからあとを頼むって帰つちやつたんですわ」

「そりや、すこし薄はくじょう情じょうだな」

「だってシンチャン達、遠いよ。松山さんだけは、直ぐそこだから、そいでもいいのよウ」

と豊ツペは、シンチャン達の郊外生活に同情ある弁明をこころ

みた。

「じゃ、僕、みてつてやろうかな」

帆村探偵は、傍そばの小こと扉びらをあけて、小さな階段をコトコトと下くだつて行つた。下り切つたところが狭い廊下になっていて、そこにだだびろつ広い室へやがある。そこは、この建物にいる皆の寢室だだ。障子を開いてみると、果してそこに寢床が一つ敷いてあつた。頭が痛いというのに、松山は頭から夜具やぐをひつかぶつて寢ていた。

「松山さん、松山さん、どうですか、気分は」

と帆村は、だんだん声を大きくしていったが、松山はウンともスンとも返事をしなかつた。

(よく睡ねむっている……)

帆村は、そつと障子をしめて踵きびすを二三歩、階段の方へ引返した。が、なにを考えたものか突然彼は、ふたたびとつてかえすと、障子をガラリと開け、靴のままツカツカと、松山の寢床に近づいたが、ポケットから点火器ライターをとりだして、カチツと火をつけると、左手で静かに枕元の方へさしだし、一方の右手を伸ばして夜具やぐの襟えりをグツと掴つかむと、ソツと持ちあげてみた。

「呀あツ——」

ライター  
点火器の淡黄色あわきいろ

山虎夫の顔であるには相違なかつたけれど、そこには最早もはやあの活いきいききいき々とした朗ほがらかなスポーツ・マン松山の顔はなかつた。顔面はドス黒く紫色に腫はれあがり、両眼は険けわしくクワツと見開いて見え能みあた

わざる距離を見つめていた。喘ぎ終った位置に明け拵げられた大きな口腔こうくうのうちには、弾力を喪った舌がダラリと伸びていた。真白な美しい歯並には、ネバネバした褐色の液体が半ば乾いたように附着していた。

「すっかり事切れている——どうやら中毒死のようだ。自殺か、他殺か。……」

流石さすがに彼は狼狽ろうばいもみせず、大きい声も立てず、だが眉宇びうの間に深い溝みぞをうかべて、なにごとか、五分間ほど、考えを纏まとめているらしい様子だった。どこから風が来るのか、点炎器ライターの小さい焰がユラユラと揺ゆめくと、死人の顔には、真黒ないろいろの蔭かげができて、悪鬼あくきのように凄すげまじい別人ぎようそのような形相ぎようそが、あとからあ

とへと構成され、畳の上から伸びあがって帆村探偵に襲いかかるかのように見えた。

やがて探偵は、しずかに立って松山の死んでいる室を立出でて、又コトコトと音をたてて階上へとつてかえした。彼は、もうセンセイでも、ホーさんでも無かった。それは帝都暗黒界の鍵<sup>キ</sup>を握る名探偵帆村莊六として完全に還<sup>かんげん</sup>元<sup>げん</sup>していた。

彼は麻雀ガールの豊ちゃん、ではない舟木豊乃<sup>ふなきとよの</sup>を静かによぶと、階下の惨事<sup>さんじ</sup>を、手短かに話をしてきかせた。声を出してはいけな  
いと言って置いたけれども、

「まあ、松山さんが死んでるんですつて！」

と驚<sup>きょう</sup>愕<sup>がく</sup>したので、残っていた人達は、早くも事件が発生し

たことを悟さとつて、わツと一時に席を立とうとした。帆村探偵は、そこで已やむを得ず、名乗りをあげて、御迷惑ながら、係官が到着して一応取調べがすむまで、御一同は一歩たりともこの室から外へ立出でないように願いたいと申渡して、一同を制した。一方、電話で、この変死事件を所轄警察へ急報すると共に、別室に居たこのビルディングの番人に、とりあえず、死体のある室を守らせた。そして今にも泣き出しそうな顔をしている豊乃を促うながして、特別麻雀室の入口に立たせ、室内はすべて其儘そのままにとどめさせた。「シンチャン達の家を知っているかい」

と帆村は、豊乃に訊きいた。

豊乃は、しばらくためらっている様子であったが、それからウ

ンと黙って首を縦たてにふつてみせた。

帆村は、事件の参考人として、さきに帰って行つた星尾、園部、川丘みどりの三人を、出来るだけ早く、この場へ召しやうかん喚かんするこ  
とが必要であると思つた。豊乃の語るところによると三人は、こ  
こから十五町ほどある道を市内電車で終点までゆき、そこから急  
行電車に乗りかえて三つ目のA駅で星尾は降り、小暗こくらい田舎道いなかみち  
を五丁ほど行つた広い丘きゆうりよう陵りやうの蔭に彼の下宿があるそうである。  
次のB駅に園部は降りる。家は駅のすぐ近くで、両親のもとに住  
んでいる。そのまた次のC駅で、川丘みどりは降りる。駅の前を  
斜くうに三丁ほど入つたところに彼女の伯母の家があつて、そこに寄き  
寓ぐうしているとのことであつた。

帆村探偵は、改めて電話を署にかけると、彼等の帰宅を擁<sup>よう</sup>して、即刻<sup>そつこく</sup>現場へ連れ戻ってほしいと希望をのべたのであつたが、それは直ぐさま承諾された。

## 3

帆村探偵は、それがすむと、一秒も惜しいという風に、階下へ降りて行って、松山の屍体を入念に調べあげた。別に特別の発見もなかつたが、唯一つ、右の拇<sup>ぼ</sup>指の腹に針でついたほどの浅い傷<sup>き</sup>

ずあと  
跡があつて、その周囲だけがいぼしよう疣状に隆起し、すこし赤味  
が多いのを発見した。これは松山が、しろぬの白布の張りかえのときに  
「痛いッ」と叫んだところのものであろうが、その傷はいつ頃か  
らこうして出来ていたものか、たし詳かでなかつた。毒物は、口から  
入つたか、注射されたか、またはこうした傷口から入つたのであ  
るか、それは興味深い問題であるが、帆村探偵はこの傷跡をちよ  
つと重大視したのである。

屍体の調べがつくと彼は階上にとつてかえして、松山達が使つ  
ていた麻雀卓テーブル子について綿密な取調べを試みた。松山の坐つ  
ていた場所については特に注意を払い、布をひっぱったり、びよう鋏を  
はずしたり、はけほこり刷毛で埃をあつめて紙包をいくつも作つたりした。

それから彼は卓子テーブルの下へ潜りこむと床に顔を押しつけんばかりにしてあちこち調べていたが、すいとりがみ吸取紙を四つに切つて、四人の足の下と思われるあたりの床の上に、すいとりがみ吸取紙をジツと押しつけ、何物かを吸い取るようにみえたが、これも又別々の紙包にして鉛筆で記号をつけた。彼は卓子の下から出ようとして、不図ふと、みどりていきやくと松山の境界線にあたる卓脚の蔭に落ちていた針のない鋷の頭を見付けた。彼は注意深くピンセットでそれを拾い上げた。それがすむと、帆村探偵は、こま牌を一個一個とりあげては、しさい仔細に観察していた。

そこへ判検事や捜査課の一行が到着したので牌の調べは一応やめて、一行を案内して屍体のある室へ行った。早速、警察医の手

で診察がおこなわれた結果、中毒死であることが明瞭となつた。絶命してから、まだ一時間と経っていないことは、屍体の腋え下きかにのこる生なま温い体温や、帆村の参考談から、証明された。しかしどんな毒物が用いられたか、又毒物がどこから入ったかは、屍体解剖の上ならでは判らないとのことであつた。帆村は拇指ほしの腹にある傷跡について一応係官の注意をうながしておいた。

麻雀卓子の辺あたりも、捜査が行われたが、それは帆村探偵のやつたほど綿密なものではなかつたのであつた。

そこでいよいよ松山虎夫変死事件の詮議せんぎがはじまることとなつた。帆村探偵は、松山たちの動静どうせいにつき、その夜見ていたままを、雁かりがね金検事と、河かわぐち口捜査課長とに説明した。それはこの物

語の最初にのべたとおりのことであつたが、彼、帆村探偵が<sup>みのが</sup>見遁した事実もかなり多い筈であると附け加えることを忘れなかつた。

いろいろ意見が出たうちで、松山は自殺したものでないという点では、誰もが一致した。彼は自殺をするような性格でもなかつたし、そのポケットから遺書らしいものはすこしも発見されなかつたし、彼の銀行預金帳には多額の預金があつたし、それに二通の手紙があつて、一通は、みどりの弟たちからのもので明日の水泳大会を見るために兄さんがおっしゃるとおり十時半<sup>じんぐうがいえ</sup>神宮外苑の入口へ行っていると書いてあり、今一つはみどりの父からの手紙で、例によつて子供たちの学資補助を仰いで<sup>きようしゆく</sup>恐縮であるという札状が金五十円也という仮領収証と共に入つていた。こ

んなにコンデイションのよい彼が自殺するとは考えられなかった。  
尚<sup>なお</sup>そのことは、彼の机を調べ、彼の屍体を解剖した上で、更にハ  
ツキリ確められる筈であつた。

それでは、松山虎夫は他人から殺害せられたものと仮りに定<sup>き</sup>  
めるとすると、一体誰が彼に毒物を盛つたのであるか、前後の事情  
を考えると、第一に疑いのかかるのは、その麻雀仲間の三人であ  
る。しかし三人について、これぞと思う証拠は係官の手に入つて  
はいなかつた。

雁金検事が、こう云つた。

「おかしいと云えば、川丘みどりが、死んだ松山と前後して、気  
持がわるくなつた点だね。それに松山のポケットから出て来た手

紙によると、松山は川丘みどりに対して、大分優越権をもっているらしいが、この二つの事実は反対の意味を持っているように思うんだが……」

「私にも二人の関係がハッキリしない」と河口警部が云った。

「麻雀ガールにちよいと訊きいてみましょう」

豊乃が呼び出されて、例の仲間について知っていることを全部のべよと命令された。それは大体、帆村が前に述べたところと大差はなかったが、その外ほかにこんなことを云った。

「松山さんは、みどりさんのお家に沢山の補助をしているんですって。それは何でも松山さんのところへ、みどりさんがお嫁にゆくという話合いが、松山さんとみどりさんのお父様の間について

いるそうです。しかし、みどりさんは松山さんが余り好きではないらしいのです」

「じゃ、みどりさんは、誰が好きなんだね」

と河口警部が尋ねた。

「さあ、それは……」と彼女は明かに当惑とうわくしている様子で口くちご籠もったが、「誰なんですか、よく存ぞんじません」と答えた。

帆村探偵は、豊乃が口籠くちごった事情に見当あがつくように思った。彼女はみどりが豊乃と同じく星尾助教授に多分の好意をよせていることを知っているのであろう。

「その話は誰から訊いたのかい」と検事が口を出した。

「園部さんがそう云いました。園部さんは近所だからよく知って

なさるんでしよう」

豊乃を一時去らせると、検事は云った。

「さっきの矛盾した事実はこれで説明ができるようだね。みどりは、金と親とに縛られて厭な男と結婚しなけりやならないのだ」

「それでは、みどりが松山に毒を盛ったとすると、どんな方法によったんでしょうか」と河口警部が反問した。

「松山が気をゆるしているとすれば、彼の湯呑へみどりが毒薬を入れることは訳のないことだ。君、松山のつかった湯呑について分析を頼んでほしいね」

「ちよつと私から申上げますが」と先刻から黙々として卓子の上に表向きにした牌を種類どおりに綺麗に並べあげて、その表

をつくづくと眺めていた帆村探偵が言った。

「こう順序よく牌を並べてみて判ったわけですが、ごらんなさい  
此処ここに九ちゆう索そうという牌が四枚並んでいます。ところでその内の  
一枚は、他の三枚にくらべて彫刻に塗りこんである絵具えのぐが莫迦に  
色褪いろあせています。一体、牌こまに水がかかると少し色がはげますが、  
よくこの牌を見ると、はげたばかりでなく元は赤と青とであつた  
ものが、赤は黒くなり、青は黄味きみを帯びています。これは水では  
げたのではなく、何か異物、たとえば他の薬品を塗りつけたこと  
が想像されます。

「ほほう、これは面白い発見だ。すると犯人は麻雀牌こまの彫りほの中  
に毒薬を塗りこんだというわけですね」と雁金検事は感嘆した。

「しかしどうしてそれが松山の身体へ入って行ったでしょう」

「屍体の<sup>ぼし</sup>拇指の腹に小さい傷が一つありましたようですが」と警部が口を出した。「深い彫りの中にある毒薬が傷をとおして簡単に身体へ入り得るだろうかね」と帆村に向って訊いた。

「犯人の準備は中々考えぶかいものです」と帆村探偵は何事かを思いうかべるかのように下唇を噛んだが「この松山虎夫は牌を持つてくるときに、拇指の腹でこの彫りのところを思いきりギュツとこする癖があるのです。それで今夜も毒薬のついている牌を、ひどく力を入れてこすったために、あの傷口から毒薬が入ったものと思われます」

「こいつは、よく判る」と検事が<sup>あいづち</sup>合槌をうった。

「私の経験から考えますと、この毒薬は阿フリカ<sup>アフリカ</sup>さんのストロファ  
ンツ草から採取したものだと思います。阿フリカの原地人は、  
こいつを槍や矢の先に塗って敵と闘いますが、これが傷口から入  
ると心臓麻痺<sup>まひ</sup>をおこします。用量が極<sup>きわ</sup>めてすくなくてよいので効<sup>き</sup>  
目<sup>きめ</sup>があるのです」

「そんな毒薬をよく、川丘みどりがたやすく手に入れたものでは  
ね」と警部が疑い深そうに言った。

「僕はみどりが犯人だと、まだ断定していない」と検事が弁明し  
た。

「それからもつと面白いことがあります」と帆村探偵は構わず話  
をつづけた。「牌を拡大レンズで観察してみましたところ、重大

な発見をしました。彫りのある角かどのところ、細くて白いせんじよ織織條うが二三條附着しています。これは犯人が毒薬を、あとで拭きとつた時に用いた材料が何であるかを語っていると思います。ピンセットで採取したものについて簡単な試験をしてみましたところ、それは脱脂綿だっしめんであることが判りました」

帆村探偵の説はあまりに明瞭なので、検事と警部は感歎する言葉もなく黙ってしまった。

「しかし」と帆村探偵はここで急にガツカリしたという様子で語調を改めた。「私のこの説は、犯人がどんな方法で松山を殺したか、それを説明したのに過ぎません。松山が誰に殺されたか、それはすこしも判っていない。こんなに多くの証拠をのこして置き

ながら、犯人自身の識別に関するものは、今のところ一つも見当らないのです。この犯人は、犯罪にかけて非常な天才を持っているのに違いありません」

それにしても帆村が短時間のうちに解決してくれた犯行の方法は、今後の取調べに非常に便宜べんぎを与えてくれるものに違いなかつた。その点で検事たちは帆村を慰めたなぐさのであつた。そこへ、三人を探しに行った刑事たちがドヤドヤと帰つて来た。

その後の取調べは、翌日のおひる過ぎから同じ場所で始められた。

「松山の死体解剖の結果、自殺ではなく他殺であることが判りました。毒物は帆村さんの説のとおり、ぼし拇指から入ったもので、死因は心臓麻痺まひ、毒物はストロファンツスらしいとのことで、すべて帆村さんの説と一致していました」

と河口警部が、最初に報告した。

「それでは私も御報告をして置きましょう」と帆村探偵が、いつに似ず元氣のない口調で云った。「麻雀卓テーブル子の附近についていろいろと集めた資料を検査してみました、すこしも犯人の見当

はつきりませんでした。これは甚だ遺憾に思つとります。唯一つお目にかけて置きたいのは、この鋏の頭です（と、前夜卓子の脚のところから拾いあげた針のとれている鋏の頭を示しながら）これは犯行に係のあるものなんです。ごらん下さい、この鋏の頭は非常に薄く擦りへらされています。これは故意にそうなされたもので、この鋏の頭に小さい穴があいていますが、この鋏を拇指の腹でグツと麻雀台に刺しこむと鋏の頭の肉が薄いために針が逆につきぬけて拇指をプスツと刺し貫く筈です。松山は犯人の注文どおりに拇指に傷をこしらえてしまったのです」

「それはお手柄だ」と検事が言った。「なにか犯人の指紋でも残っていないませんか」

「松山の指紋はハッキリ附いていますが、其の外ほかには誰の指紋も見当りません」

「すると犯人は松山にその鋏をつかわせる機会を覗ねらっていたことになるね」と警部が云った。

「その鋏を使わせるために、犯人は湯呑み茶碗をひっくりかえさせて、白しろぬの布をとりかえました」

「ウン、それは」と検事は控帳ひかえちようの頁をくりかえしてみながら「湯呑をひっくりかえしたのは星尾信一郎だな。星尾に嫌疑けんぎがかかりますね」

「だが雁金検事」と帆村は言った。「茶碗をひっくりかえされるような場所に置いておくこともできますからね」

「それでは園部の湯呑み茶碗だったというから、園部が犯人というわけだね」と河口警部はおかしそうに笑った。「そりや余りに考えすぎていませんかな。それよりも犯人は殺人の機会をとらえるために、常に毒物や、仕掛のしてある鋏や、それから帆村さんの説によつて使つたことが判つた脱脂綿などを常に携帯していたわけだから、昨夜捕えてきた三人の所持品を検査すればいいと思う。いや、実は今朝、部下のものから報告があつたのですが、問題の脱脂綿だっしめんがみつかったのです。それを持っていた人間まで解つています」

検事と帆村探偵は呆氣あつけにとられた。

「それは星尾です。実は星尾を押しおさえに行つた部下の刑事が、こち

らへ護送してくる途中、星尾がソツと懐ふところから出して道端みちばたに捨てたのをいち早く拾いあげたのです。それには茶褐色ちやかっしよくの汚点おてんがついていました。鑑識かんしき係かかりにしらべさせたところ、例の毒物がついていたのです

「星尾に当たってみましたかね」と検事が訊いた。

「早速当たってみました。が、白状しません」

「そりやそうだろう。星尾には松山を殺す動機がすこし薄はくじやく弱やくすぎる」

「そうでもありませんよ、雁金さん。星尾は理科の先生です。科学的なことはお得意の筈です。それに星尾の父親というのが神戸に居ますが、これは香料こうりょう問屋いんやをやつて、熱帯地方からいろいろ

ろな香水の原料を買いあつめては捌さばいているのです。阿ア弗フ利リ加カの薬種やくしゆを仕入れる便利が充分あります。それから星尾は、すこし変態性欲者だという評判です。それから湯呑み茶碗をひっくりかえしたのも、兎とに角かく、彼でした。彼の犯行現場が帆村さんの眼に入らなかつたのは先生背後うしろを向けていたからです」

そう云えば帆村は、星尾の牌パイがよく見えるところから、そればかりに気をとめて、其の行動には余り注意をしていなかつた。警部の指摘した証拠は、たしかに星尾に濃厚な嫌疑をかけてよいものだった。

そこで一同の前に星尾が引っぱり出されることになった。脱脂綿と毒物の出所でどころについて自白を迫つたのであつたが、彼は中々

思うように喋らなかつた。しかし警部が、物馴れた調子で彼に不利益な急所をジワジワと突いてゆくと、流石にたまりかねたものと見えて、彼はとうとう口を開いた。それは検事たちの思いも設けぬ種類のことがらだつた。

「実は、あの綿は、麻雀を打っているときに、みどりさんの袂から盗みだしたのです。毒物については存じません」

赤くなつたり青くなつたりして星尾の物語るところは、満更まんざら嘘うそであるとは思えなかつた。彼はその変態性欲について大いに慚愧んきにたえぬと述べて、汗をふいた。

それで彼の嫌疑は晴れたわけではなかつたが、兎とに角かく、みどりに綿と毒物の事を訊問じんもんしてみることにした。彼女は、すこし取

乱している態さまで、昨夜彼女を連れて来た刑事に助けられつつその席についた。取調べによつて彼女はこんな風に弁明した。

「わたしは昨日から……」とすこし言い淀よどんでいたが、「実は月メ経ンスになつていたのです。だから脱脂綿をもっているのに不思議はない筈はずではありませんか。毒物のことは存じません。松山が死ぬばよいと思うかとおつしやるのですか、それは私にとつて悪くないことですよ。どんなに男にだつて、お金で買われてゆくのは厭いやです。併しかし、わたしは松山さんを殺した覚おぼえなんかございません」

調べついでに園部を呼んできいてみた。徹頭徹尾、彼は知らないと答えた。みどりが脱脂綿を持っていたと白状したがお前は

知っているかと訊いたところ、彼は「それは嘘だ」と言つて強く否定した。訊いてみると彼は月経というものについての知識にさえ乏しい少年であることが判つて警部はおかしそうに笑い崩れた。星尾が脱脂綿を持っていたのを知らぬかと訊いたが、これも「知らぬ」と言つた。

すると附添つていた刑事が口を出した。

「この人は、星尾が綿を捨てたところを見て注意して呉れたんです。実は、私はこの人を捕えに行つたのですが、とうとう見当らず、空手で帰つて来ました。ところが星尾をさがしに行つた本田刑事は、星尾とこの人が一緒に暗い田舎道を歩いていたところを発見して連れてかへつたのですが、その途中、星尾が捨てたと

ころを注意してくれたんだと云ってました」

その刑事が呼びだされて、それに違いないと答え、尚、あとで報告するつもりであつたが園部の懐中から、こんなものを発見したといつて、長さが五六寸もあるニツケルの文鎮ぶんちんを提出した。園部の弁明によると、それはB駅を下りたところで店をしまいかけた夜店よみせの商人から買ったのだという。

「何故、君はB駅で降りないで、一つ手前のA駅で降りたのですか」と帆村がこの時、横合いからきいてみた。

「あの晩はいやな気持ちになつたので、星尾君とすこし歩いてみるつもりだったので」と齒切れのよい言葉で園部は答えた。

次に念のため麻雀ガールの豊乃が訊問じんもんをうけることになつた。

いろいろと訊いているうちに豊乃は、とうとう泣き出してしまったが、最後にのべたことは、係り官の頭脳を滅茶苦茶にかき乱してしまった。

「わたしは、星尾さんがみどりさんの袂から綿を盗んだのをみました。わたしは、口惜しかったので、星尾さんの背後うしろにまわって、その綿を盗んでやりました。その綿はクルクルに丸めて屑籠くずかごに捨ててしまいましたけれど、探せば見付かるでしょう」

その脱脂綿だっしめんは果して屑籠の中にあつた。

しかしそれでは脱脂綿について、星尾に対する嫌疑は、みどりのところから逆戻りの形になった。みどりから盗んだ綿は、星尾の手に入り、それから豊乃の手にうつったものとすれば、星尾が

田舎道に捨てた毒物の附着している綿はどこから彼が持つて来たのであろうか、彼自身が始めから持つていたものと解釈するより外ない。園部が捨てたのではないことは、星尾がその綿を所持していたことを自白している。しかし星尾は豊乃に奪<sup>だっしゅ</sup>取されたことを知らないらしい。

今や、事件の焦点は脱脂綿の出<sup>でどころ</sup>所にあつめられた。みどりの用意していた綿の外に、どこからか星尾が持つて来た毒物の附着した綿があるのである。しかし、その出<sup>でどころ</sup>所を確かめる鍵<sup>キー</sup>は、どこにも見当らなかつた。随<sup>したが</sup>つて松山殺しの犯人は星尾を最も有力とし、川丘みどりを第二とし、園部を第三とし、豊乃は多分犯人ではあるまいと思われるが、一応第四としてみたが、さてこれ

ぞと思う有力な証拠もあがらなかった。事件は文字どおり迷<sup>めいきゆ</sup>宮<sup>う</sup>へ入ってしまったのである。

## 5

其夜<sup>そのよ</sup>、帆村探偵は、彼の研究室に閉じ籠<sup>とこも</sup>って、事件の最初から今日の調べのところまで幾度となく、復習を試みた。考えてみると、星尾とみどりの嫌疑の濃厚なのに比べて、園部については殆んど考えることがなかった。しかし、それは本当になにも疑う

べき点が無いのであろうかと、帆村探偵は一時、仮装殺人を園部の上につつして考え直してみた。

的確なる証拠というものはなかったけれども、疑えば（一）園部が湯呑み茶碗をわざと倒されやすい場所に出して置いたと考えられること。（二）みどりが気分が悪いと云ったときに彼が非常に狼狽したのは、彼が牌に塗りつけた毒物がみどりを犯したのではないかと危んだせいではあるまいか。（三）園部の座席は一番隅で毒物を塗ったり、あとで毒物を脱脂綿で拭いたりするのを秘密にやりやすいこと。（四）星尾が脱脂綿を落したことを園部が刑事に教えたのは、他のことについては口を緘して語らない彼としては、不審な行動と思われなこともないこと。（五）園部

が、わざと星尾と同じ駅に下車し、しかも人殺しの兇器になりそうな文鎮ぶんちんを買って持っていたことなど、不審と言えば不審である。けれどもそれは全くの不審にすぎないことで、証拠として残されたものは一つもないのであるから、まことに根拠は薄弱で、だんざい断罪の日には「証拠不十分」として裁判官から「いつしゆう蹴されるべき性質のものだった。

この個條書を、くりかえし眺めていた彼は突然、

「こりや、可笑おかしいぞ」

と呟いた。

(五)の個條のところ、園部が文鎮ぶんちんを買ったことを指摘しているが、若しこれは園部が星尾を帰宅の途中で殺害するつもりで

用意したものとすると、一体園部はどんなきつかけから星尾を殺す決心を急に起したのであるか。そんな下手な殺し方をすれば彼のしたことは直ぐ判明する筈であつた。それが判らぬ彼ではないのに、敢<sup>あ</sup>えてそうしたのは、急に何か星尾に握られたものがあつたのではあるまいか。刑事が行き合わなかつたら、星尾はすでに此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の人でなかつたかも知れないのである。

そう考えると、彼は星尾に会つて問<sup>と</sup>い訊<sup>ただ</sup>したいと思つた。仕度をする、直ぐに留置場へ行き星尾に、何か陳<sup>の</sup>べわすれているものはないか、特に電車の中あたりで何か無かつたかと尋ねてみた。星尾は別に大したことはなかつたようだ。言いわすれたのは、電車の中で自分が不用意にも下に落した脱脂綿を遽<sup>あわ</sup>てて拾いあげ

るところを園部にみられた位のことだと言った。

念のために、川丘みどりを引出して、云い忘れたことはないかと尋ねたところ、彼女は前よりもすこし落付きを見せて答えた。

「わたし、ちよつとしたことを忘れていましたのよ。それは倶楽部クラブで麻雀をうっているとき、不図ふと足の下を見ますと、アノ脱脂綿が落ちていましたもんで、まア恥はずかしいことだと思ひソツと拾いあげたんです。それは、もうやめるすこし前のことでした。たしかに拾いあげて袂たもとに入れた筈の脱脂綿が、あとで気がつくとなかつたんです」

それは明らかに、第一の綿を星尾に盗まれた後の出来事に違ひなかつた。その綿には例の毒薬がついていたのだ。これは後に星

尾の手に入ったものである。そこで彼は思いついて尋ねた。

「あなたは、電車の中で、どこに坐っていましたか」

「そうですね、あの時はあまり蒸し暑くて苦しかったものですか、となりの電車の箱との通路になっているところの窓をあけて涼んでいました。あそこは、電車の速力が加わるととても強い風が吹きこんできて、あたし、やっと気分が直つてきましたのよ」

帆村探偵はハタと膝をうった。そのとき、強い風のため、みど

たもと

りの袂から脱脂綿が吹き飛ばされると、コロコロと転ころがつて星尾の

前に行ったのであろう。星尾は第一の綿を豊乃に盗まれたことは知らぬから、それは自分が落したものと勘違いをしてあわてて拾いあげたものであろう。すると、問題はいよいよ狭くなった。川

丘みどりが、麻雀俱樂部マーじゃんクラブで拾った毒物どくぶつのついた綿は、誰が落したのであるか。

園部が星尾に対して殺意を生じたわけが、始めてうまく説明がつくようになった。その綿は無論、園部が犯行に使ったもので、つい誤って下袴したばかまの間から落ちて、川丘みどりに拾われたものである。しかし、それとても彼の自白を待たぬば格別立派な証拠物はないのだ。園部のおどろくべき犯罪天才は、奇抜な方法で友の一人を殺し、他の二人の友人に濃厚な嫌疑をかけることに成功している。容易なことでは園部に自白を強しいることはできない。帆村探偵は苦しそうな呻うめき声を洩もらしつつづけて、ものの三十分も考えていたが、臆やがて急に輝かしい面持おももちになって立ちあがると、

宿直の警官を煩わづらわして、雁金検事や河口捜査課長の臨りん席せきを乞うた上で、園部をひっぱり出した。園部は、割わり合あいに元気に、美しい顔をニコつかせて帆村の前にあらわれた。それは如何にも自信あり気げに見えて、帆村探偵の敵愾てきがいしん心を燃えあがらせた。

帆村は彼を前にして、松山虎夫殺害事件の詳細を細こまごま々と語り出した。

園部は、彼の名が出て、また彼が殺人魔として活躍している状況を詳しくのべられても、まったく顔色一つ変えなかった。

帆村探偵はソロソロ自みづからの仮定が不安になってきたが、今に見ると元気を鼓舞こぶして、最後の切り札をなげだした。

「ところが、巧妙なる犯人が、唯一ただ一つ気がつかなかったことがあ

る。それはこれです」

と彼はピンセットの先端に針のとれた鋏びようの頭をつまみあげて云った。

「この鋏の頭には二つの指紋がついていたのです、よろしいか。一つは、無論、これで傷口をこしらえた故松山虎夫君の指紋です。今一つは彼の指紋ではない。この鋏を彼に使わせるように計はからつた彼の犯人の指紋なんです。用意周到な犯人が、ありとあらゆる証拠を湮滅えんめつすることに成功しながら、唯一つ置き忘れた致命的の証拠なのです。

どうです。心憶こころおぼえはありませんか。そうでしょう。犯人は牌こまに塗った毒薬をアルコールのついた脱脂綿で拭うことに夢中に

なつて、この鋏びようの頭にのこる指紋を拭くことを忘れてしまったのです。——そこで園部さん、君の指紋をちよいと取らせていただききたいんですが……」

園部の顔がんしよく色はこのとき急に蒼白そうはくに変じ、身体をブルブルと震わせたが、

「すまない、松山君！」

そういうと、背後へドウと倒れてしまった。

\* \* \*

「あの鋏の頭に犯人の指紋はないと、君は言ったではないか」と雁金検事が不審そうに、あとで帆村きに訊いた。

「いやあれは——」

と帆村が頭を搔きながら言った。

「いやあれは兵法へいほうですよ。あんなに機械のように正確な犯罪をやりとげた犯人も、やっぱり機械でない悲しさには、思いもつかぬことを指さされると、ハッキリ用意ができていないために、急に『不安』が入道にゆうどうぐも雲ものように発達して、正体まで顕あらわしてしまうのですね。これは屢々しばしば河口警部のお使いになる手で、私のは機を覗ねらつてうまく逆手に用いて成功させたのです。しかし逆手をつかったことといい、犯罪を目の前にみていて気がつかなかったことと云い、徹頭徹尾てつとうてつび私の大敗北ですよ」



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年5月号

入力：t a k u

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 麻雀殺人事件

海野十三

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>